

巻頭言

断層映像研究会への期待

河野 通雄

今年はX線発見100年になる。手のX線透視像で骨が黒く見えると当時の報告に述べられているが、我々が放射線科に入局して初めて透視を経験した感慨も全く同じであったし感動したことを覚えている。

X線を中心とした最近の放射線医学の進歩発展はめざましいし、放射線医学の未来は洋々としている。一方、放射線科医の未来はと考える時、かつて感動を覚えたX線透視を様々な領域に応用しつつ体をはって医療に貢献して来た頃と現在を比べてみるといささか様変わりをしている。

病を癒すのが臨床医であり、仏教用語に六師外道という言葉がある様に、その考え方や方法は様々であっても目指すゴールは同じである。放射線科医も内科医も外科医も六師外道の一人であるはずが、ややもすると臨床的知識のあるテクニシャンになってはいまいか？

病める人と対話をし、体に触れ、能力のある限り病める人の診断と治療を試みるべきではなかろうか。ここで考えるべきことは、Technology orientedではなくOrgan orientedが重要でないかということである。各臓器別放射線医学が一つの輪になり放射線医学を構成するという考え方である。technologyを専門にするグループは主として優秀なPhDの集団で構成され、このグループと臓器別臨床放射線医師が共に密接な関係をもつことは言う迄もない。断層映像研究会のスタートはtechnology中心であったことはいなめない

が、時代と共にその内容は、臓器別になっている事実がそれを証明している。さて、臓器別放射線医学とはいっても先に述べたように診断だけやればそれでいいという訳ではない。画像診断のみならずその疾患のすべての臨床的背景を十分に理解しておく必要があることは云う迄もないし治療が仮に外科的または内科的であるにせよその方法について理解が必要であり、時にはそれを実践する力を持っていればそれにこしたことはない。一方、日本医学放射線学会傘下の各種研究会のあり方に関する答申が日本医学放射線学会の将来計画委員会から出され、本断層映像研究会に対する意見が最も多く出されている。23年の歴史をもつ本研究会の役目も、最早や終りを迎えたかという感じもするが、断層映像という名称はむしろユニークであり、名称にこだわらず、その内容を様々な切口から眺めてみるとおもしろい。様々な学会の変遷をみると内容は随分変わってしまったものもあり、しかも学会の名称はそのままのものも多い。

要は、その時代のトピックスや社会のニーズを反映させる学会運営が必要なのかもしれない。研究会というのはその点小廻りがきいてむしろ便利がいい。

ともあれ断層映像研究会のあり方について会員自信が考え模索し練る程、向上して行くものと期待している。

(神戸大学医学部放射線医学講座教授)